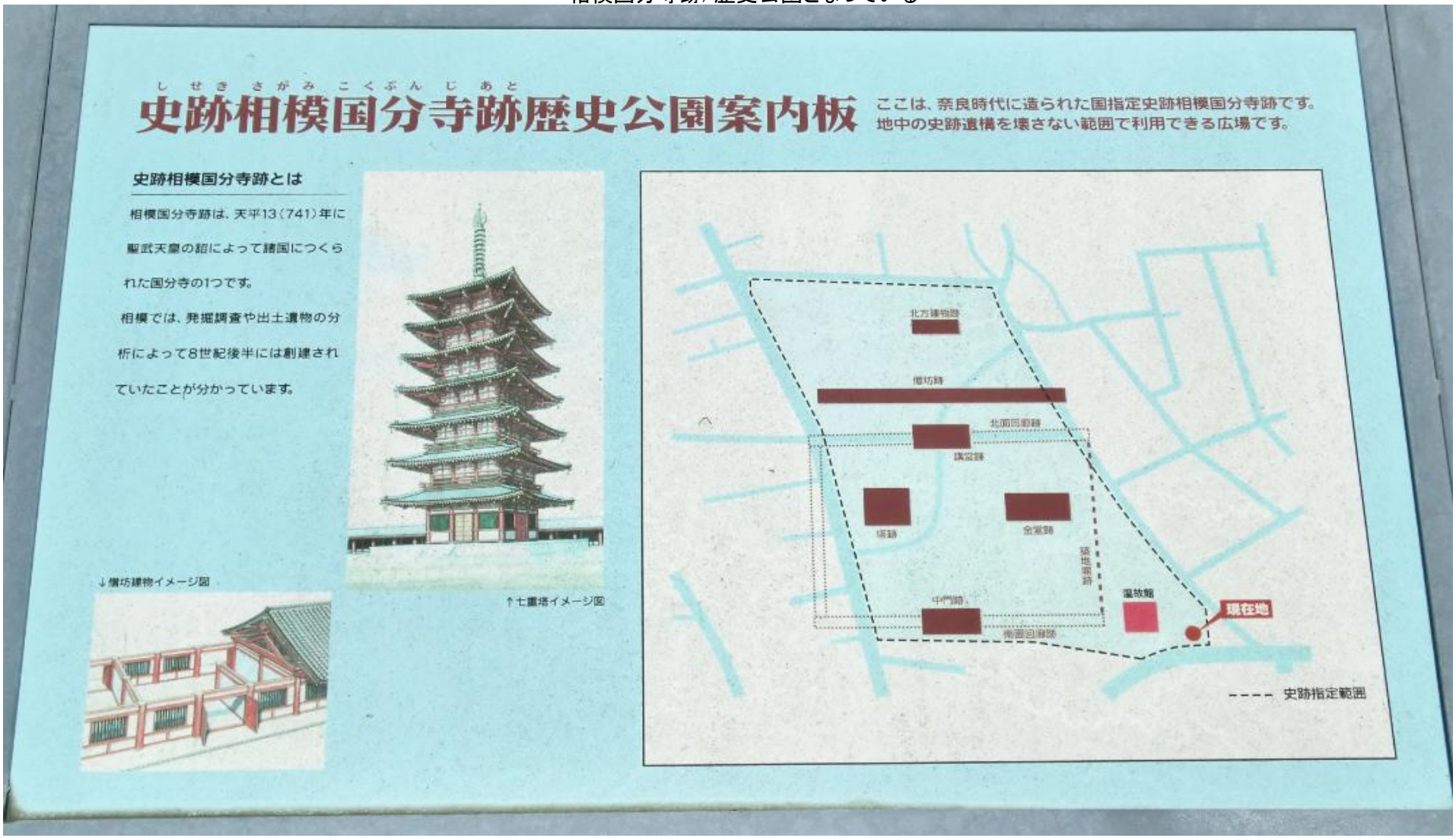
フィールドスタディー（平成26年.秋） シリーズ講座　郷土の歴史を学ぼう「転換期の考古事象を考える」

相模国分寺跡

相模国分寺跡/歴史公園となっている



ここにも説明板が立っている/後ろが歴史公園

国指定史跡

相模国分寺跡（さがみこくぶんじあと）

大正十年三月三日指定

七四一（天平一三）年に全国に国分寺建立の詔がくだされ、相模国では海老名のこの地に建てられた。

相模国分寺の伽藍は、塔と金堂が東西に並び、その北側に講堂が配置される法隆寺式である。講堂の北には僧坊・北方建物が配置され、諸国国分寺の中でも武蔵、陸奥と並んで全国最大規模クラスである。

文献では相模国分寺は八一八（弘仁一〇）年に2回災上し、八七八（元慶二）年に地震にあい焼失したとしているが、一九六六（昭和四一）年の発掘調査で焼失後に再建されていることが確認された。

平成三年三月

海老名市教育委員会

また、こちらにも説明板があった/右手の基壇は「塔跡」

史跡相模国分寺跡環境整備事業

相模国分寺は、741年（天平13）の「国分寺建立の詔」によって全国に建立された寺院の一つです。

819年（弘仁10）と878年（元慶2）に相模国分寺が被災したという記録が残っていますが、940年（天慶3）には相模国分寺の仏像が汗をかいたという記録があることや発掘調査の結果等から、平安時代中頃までは修理や再建が行われていたようです。

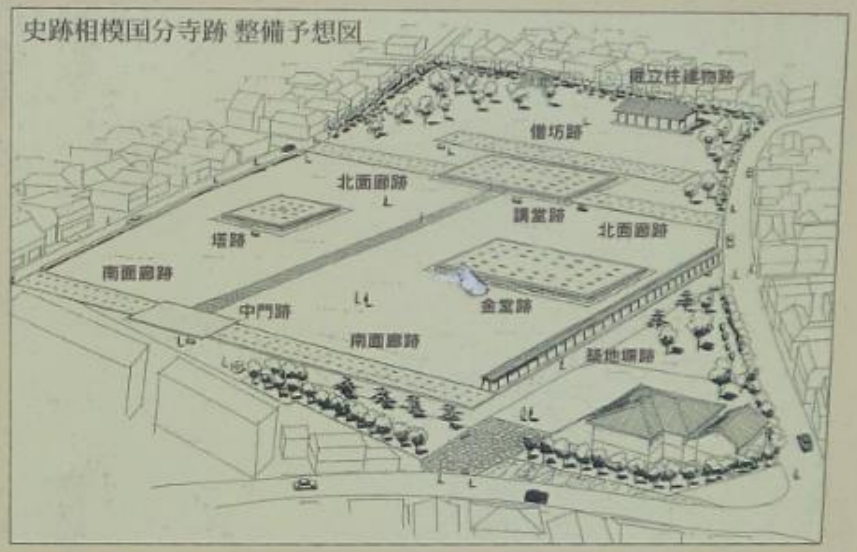
しかし、平安時代後期には荒れ果て、やがて現在の国分寺の場所に移転したといわれています。

相模国分寺跡は、江戸時代に書かれた「新編相模国風土記稿」の挿し絵にも遺跡が描かれているほど古くから知られていました。

明治時代後半から大正時代にかけて尋常高等海老名小学校（現在市立海老名小学校）の校長であった中山毎吉が相模国分寺跡や国分尼寺跡などの遺跡を調査して、矢後駒吉とともに「相模国分寺志」という研究書にまとめました。

こうした中山毎吉等の調査研究や保存運動により1921年（大正10）3月3日に相模国分寺跡は「国指定史跡」となりました。

海老名市では貴重な文化遺産である史跡相模国分寺跡を現状のまま保存するだけではなく、復原・整備をする環境整備事業を平成元年度（1989）から始めました。



1966～67年（昭和41～42）の発掘調査結果をもとに、1990～1996年（平成2～8）にかけて塔跡、中門跡、南面廊跡、僧坊跡等の発掘調査を行い、史跡整備に必要な資料をそろえました。

基本的な整備計画は、相模国分寺の創建時の遺構を整備することにしました。具体的には、塔・金堂・講堂の基壇復原、中門・廊跡・僧坊跡等の位置表示を行い、現存する礎石は現位置で保存する計画です。

2000年（平成12）3月
海老名市

○史跡は、みんなの大切な文化遺産です。大切にしましょう。

「中門跡」→「塔跡」→「金堂跡」→「講堂跡」→「僧坊跡」→「北方建物跡1」→「北方建物跡2」の順で回ってみよう/「逆川跡」（水色）は当時人工的に造られた運河跡

「史跡相模国分寺跡　史跡相模国分尼寺跡」/海老名市教育委員会　より

まず、これは南面廊跡と「中門跡」を西側から東方向に見たところ

この幅の広いところが「中門跡」

これは反対に東側から西方向に見たところ/南面廊跡には礎石が出土した位置にレプリカが並べられている

「史蹟　相模國分寺阯」と記された標柱と中門跡・南面廊跡の説明板

中門跡・南面廊跡

中門跡・南面廊跡は、1966(昭和41)年と1993(平成5)年に発掘調査が行われました。中門の基壇土は、耕作などで削り取られてほとんど残っていませんでしたが、南面廊との関係から正面20.7m(69尺)、側面10.8m(36尺)の基壇であったと推定されています。

南面廊の西側もすでに遺構面が削られて残っていませんでしたが、東側の調査した範囲では10個の礎石が旧位置に残っていました。この礎石から南面廊は桁行柱間が5.4m(18尺)桁行柱間が3.0m(10尺)の等間隔になります。また、礎石の上に残る柱の焼失痕から直径約30cm(1尺)の柱であったと推定されています。

発見された廊跡の礎石は、遺構保護のため埋め戻し、同じ位置に河原石を使って再現しました。中門の基壇は、推定範囲を表示してあります。

南面廊跡（平成5年、東から）

南面廊礎石
（平成5年、白線が柱の痕跡）

TYUUMON · KAIROU

KONDOU(Budda Hall) was surrounded by an enclosed corridor, KAIROU. KONDOU, which consisted of Buddhist images, and a tower, was separated from the outside by KAIROU. TYUUMON was the gate, which was established as the entrance, to the inside corridor. An excavation investigate was done in 1966 and 1993. However, a marking of TYUUMON, an entrance gate was not found.

The size of KIDAN, a foundation of TYUUMON, is presumed to be 20.7m east to west, and 10.8m north to south in relation to a corridor mark.

A corridor's pillar (roof support) was found at an interval, of 5.4m north to south and 3.0m east to west, from a discovered corner stone. A buried corner stone of the corridor was preserved.

However, it reappears by placing stone in position with the preserved corner stone.

1998年3月 海老名市
MAR 1998 EBINA CITY

これは「中門跡」から北方向を見たところで左手に「塔跡」、右手に「金堂跡」の基壇が見える

左手の「塔跡」

右手の「金堂跡」

さて、「塔跡」を見てみよう

説明板がある

塔　　跡

ここは741(天平13)年の「国分寺建立詔」をうけて建てられた七重塔の跡です。国分寺の塔には、国家の平安を祈る金光明最勝王経が安置されていました。

1966(昭和41)年と1992(平成4)年に行った発掘調査で基壇(建物の基礎となる土盛)は、一辺の長さが20.4m、高さは1.8mの規模であったことが確認されました。残存する礎石から、塔の初重の広さは、10.8m四方で、塔の高さは約65mあったと推定されています。

塔跡のまわりからは屋根瓦(布目瓦)や水煙等の遺物が出土しています。

また、基壇周辺で発掘された石敷や盛り土から2回の修理もしくは建て替えが行われたことも分かりました。

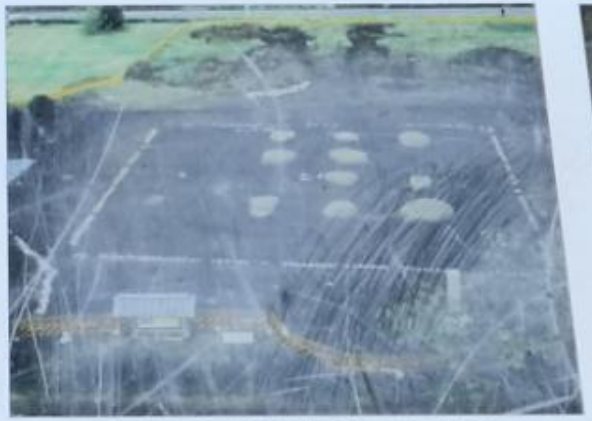
創建時の基壇は、現在復原されているように、四辺ともに切り石積み(壇正積)でしたが、後に北側の辺だけが川原石積み(乱石積)につくり替えられています。

石質調査の結果、切り石は相模川上流から、礎石は丹沢方面から運ばれたものと推定され、両方とも凝灰岩質の石です。

10個の礎石は当時のままですが、失われた礎石は国分寺跡から運び出されたといわれる礎石3個と新たな石4個を使って復原・補充しました。

基壇の高さは、基壇周辺の遺構を保護するために盛り土したので、創建時の基壇よりも約35cm低く復原しました。

相模国分寺七重塔想定復原図



発掘された塔跡(平成４年、南上空から)

基壇周辺の石敷(東南部分、東から)

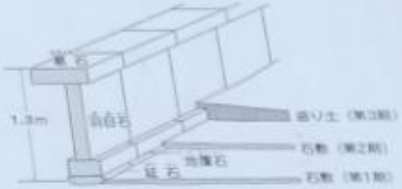
地覆石と延石(南辺、東南から)

金銅製水煙の破片
(塔跡出土)

The "Seven-Layers Tower"

The "Seven-Layers Tower" was built here.
It was one of the buildings of the Sagami-kokubunji-temple.
The Sagami-kokubunji-temple was built in order to pray for peace of the country at the end of the eighth century.
We excavated it in 1966 and 1992. Based on this investigation, we reconstructed the KIDAN (foundation) as it used to be in the old days.
The basic size is 20.4m squared.
Based on a study, the height of the tower is supposed to be 65m.

乱石積(北辺、東から)



壇正積基壇の模式図

塔相輪部分
(相模国分寺模型・部分)

海老名市

東側から見た「塔跡」

雨落溝の区画も見える

これは塔の礎石跡を示す

中央が四点柱跡の礎石と心柱跡の礎石位置

この大きな礎石が心礎跡

「塔跡」から「金堂跡」方向（東方向）を見たところ

さて、前方が「金堂跡」/南側から見たところ/地盤右手は左手から緩やかに上がっており、基壇と地盤との段差が少なくなっている

これは「金堂跡」を西側から東方向に見たところ

「金堂跡」の基壇上には「相模國分寺遺蹟」と記された標柱が立っている

また、礎石の位置も示されている

これは「金堂跡」から「塔跡」方向を見たところ

さて、これは北側の道路を渡ったところにある「講堂跡」の礎石位置を示す/講堂の前半分ほどが道路で破壊されている

これは「講堂跡」の更に北側にある「僧坊跡」

柱や壁の位置が示されている

僧坊跡

僧坊は、国分寺の僧が住んでいた建物です。国分寺建立の詔では、僧は20名が定員とされていました。

国分寺建立の詔の後も、塔・金堂・僧坊の早期完成が求められていることから、僧坊が塔や金堂と並ぶ重要な施設であったことが分かります。

僧坊跡は、1966年（昭和41年）の発掘調査で初めて見つかり、1996年（平成8年）の発掘調査により全体的な建物形状などが確認されました。また、西側半分桁行側で約81m（25間分）、8部屋分が確認されました。

当初は掘立柱式建物でしたが、火災で焼けるなどし、礎石建物に建て替えられたことが分かりました。

一部屋は、桁行が約9.0m（30尺）、梁行が6.57m（22尺）で、部屋の内部に浅い柱穴があり、束柱か間仕切りがあったと推定されます。

柱穴は、直径1.2～1.5mの隅丸方形で、深さは0.8～1.2m、柱を抜き取った痕跡から直径約30cmの柱が建っていたと推定されます。柱穴の底には、柱の沈下を防ぐために石や瓦を敷いたものがありました。

遺構は、地下に埋め戻して保存し、壁があった位置を縦線または横線で、柱があった位置を○で表示しています。

僧坊イメージ図

発掘調査写真

重複している柱穴

柱穴の上に
据え付けられている礎石

柱抜き取り痕のある柱穴

柱あたりに瓦を敷く床柱穴

Site of Priests' Dormitory (*sōbō*) at the Sagami Provincial Temple.

Here is the site of priests' dormitory at the Sagami Provincial Temple, which was erected in the late 8th century. The site was archaeologically confirmed in 1966, and large-scale excavations took place in 1996. As a result, the western half of the priests' dormitory was unearthed, where eight quarters were discovered. The size of an individual quarter was 9.00×6.57m. The wooden supra-structure of the dormitory was supported by pillars of approximately 30cm in diameter. The pillars were planted into the ground 0.8 to 1.2m in depth.

After the archaeological investigation of 1996, the site is preserved underground.(Ebina City, Kanagawa Prefecture, December 2002)

2002年12月 海老名市

これは更に北側にある「北方建物跡１」/柱の位置が樹木によって示されている

ほったてばしらたてものあと
掘立柱建物跡
この遺構は、1965(昭和40)年の発掘調査で見つかった掘立柱建物跡です。
柱穴の一部が確認され、南側に庇(ひさし)のつく東西棟の建物です。
この建物の用途は、不明です。
This site was excavation in 1965.
An use of this site is unclear.
2000年3月 海老名市
MAR 2000 EBINA CITY

これはそこから南方向を見たところ/「僧坊跡」の向こうが「講堂跡」や「中門跡」となる

さて、ここは「北方建物跡１」の左手（西側）にある「北方建物跡２」

やはり、柱の位置が樹木によって示されている/西側から東方向を見たところ

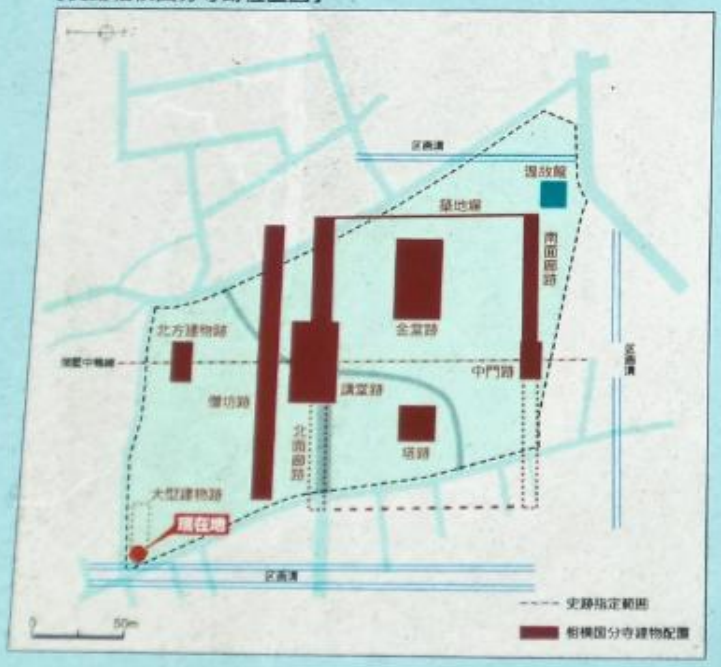
寺域は「区画溝」で区画されていたと記されている

大型建物跡・区画溝

ここは史跡相模国分寺跡の北西部に位置し、平成15・16年度の発掘調査によって、大型建物跡と国分寺の敷地を区画する溝が確認されました。

大型建物跡の坪掘地業が見つかった場所にはツゲを植栽し、区画溝の範囲を舗装により表示しています。

【史跡相模国分寺跡位置図】



■大型建物跡

平成16年度の発掘調査で、桁行（東西）34m以上、梁行（南北）10.5mの大型建物跡と考えられる遺構が出土しました。

大型建物跡は、礎石建ちの遺構で、礎石を据えるために地面を突き固めた坪掘地業の痕跡が11個見つかっています。

このような大型の建物は、全国的に類例が少なく、建物すべてが発掘されていないため、何に使われたかは不明確です。

しかし、位置や構造から、国分寺を運営する様々な機能をもった施設の一部ではないかと推定されます。

大型建物跡発掘調査状況（西側から）

■西側区画溝

西側区画溝発掘調査状況（南から）

発掘調査により国分寺の敷地は、断面逆台形状で、幅約1.2～2.2m、深さ約1.9～3.0mの素掘りの溝によって区画されていたことが確認されました。

西側区画溝は、3条確認され、この場所で見つかった溝は、覆土中から出土した土師器や瓦の破片から創建期（8世紀代）のものと推定されています。

都の寺院では、築地塀などの区画施設が見つかっていますが、相模国分寺跡では素掘りの溝のみで、築地塀などの区画施設は見つかっていません。

2006年3月　海老名市

温故館

さて、ここは海老名市温故館/寺域の南東隅にあったものが、ここ（西側）に移築された

大正時代の建物

海老名市立郷土資料館　海老名市温故館（旧海老名村役場庁舎）

この建物は、大正７（1918）年に海老名村役場庁舎として建築されたものを一部移築保存し、復元したものです。

明治22（1889）年の市制・町村制の施行により「海老名村議会」が発足し、国分に「海老名村役場」が設置されました。しかし、明治43（1910）年の国分大火により建物が焼失、薬師堂（現・国分寺）の庫裏を仮庁舎としていましたが、大正５（1916）年頃から新庁舎の建築が計画され、大正７年に竣工しました。

木造２階建て桟瓦葺、外壁は、ドイツ下見張り※注で飾り柱を設け、南正面に切妻造りの玄関ポーチがありました。

柱には特徴的な柱頭飾り、玄関ポーチにはバージボードと呼ばれる飾り破風、垂飾り、装飾的な方杖が取り付けられ全体として直線的で素朴な装飾の建物となっていました。

この建築様式は、郡役所様式と呼ばれるもので明治から大正時代にかけて役所などによく用いられ、海老名村国分の大工・藤井熊太郎が棟梁となって建築されました。

外観を洋風建築とする一方で、小屋組みや土台、軸組などは日本古来の建築を踏襲した和洋折衷の建物でした。

大正期

昭和57年

※注　増築部分は、南京下見張りでした。移築後は全面ドイツ下見張りとなっています。

昭和32年

大正期

周辺案内図

●利用案内●

開館時間　９：００～１７：１５（入館は１６：４５まで）

休 館 日　年末年始（１２月２９日～１月３日）
※展示入替などで臨時休館することがあります。

所 在 地　神奈川県海老名市国分南一丁目６番３６号

※入館される方は、次の事項を守ってください。

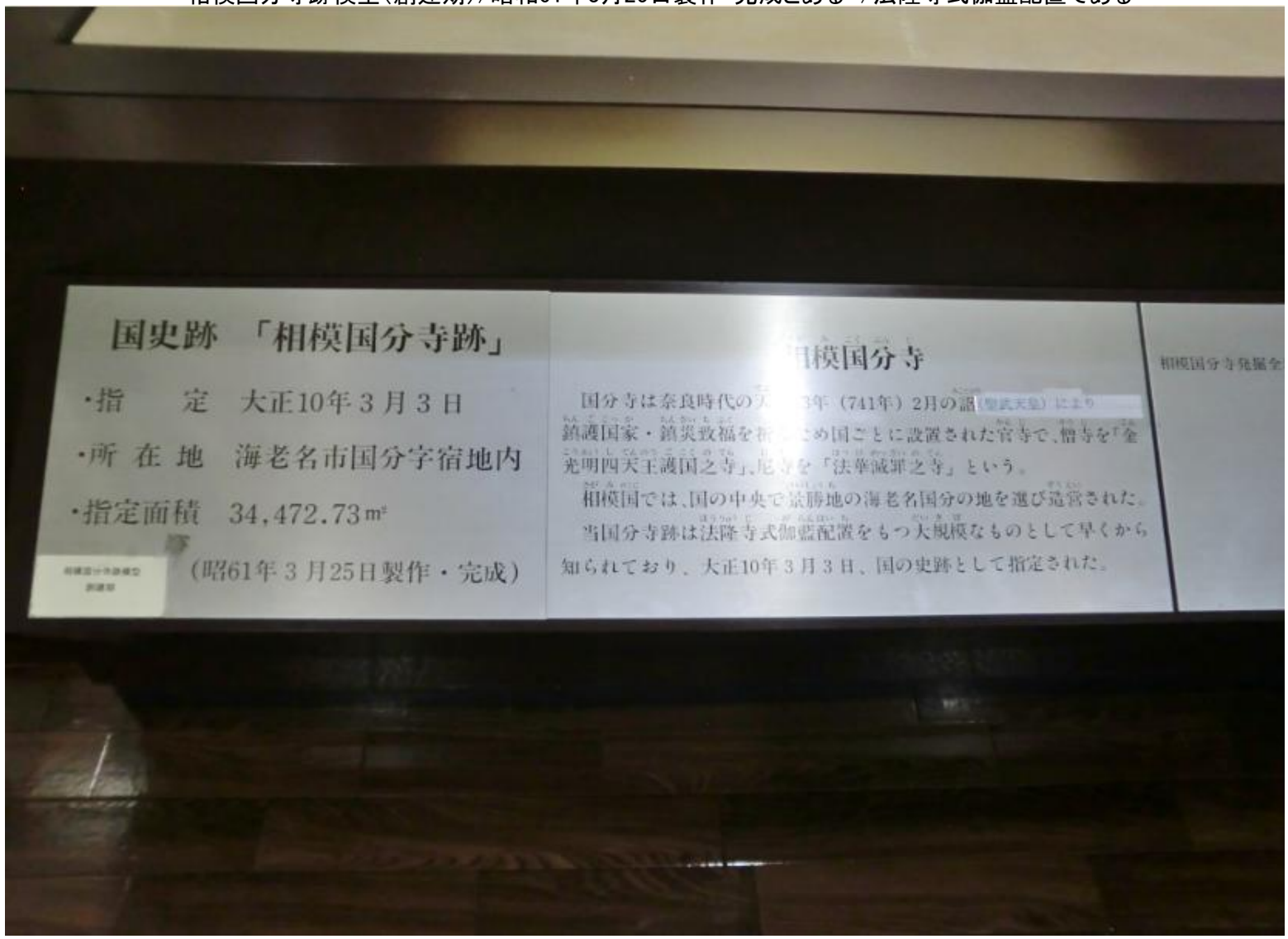
（１）郷土資料館の資料及び施設等を損傷し、又は滅失しないこと
（２）資料の模写、模造及び写真撮影を許可無く行わないこと
（３）他人の迷惑となるような行為をしないこと
（４）その他郷土資料館の職員の指示に反する行為をしないこと

※次に該当する場合は、入館をお断りすることや退館していただくことがあります。

（１）他人に危害又は迷惑を及ぼすおそれがあると認められる方
（２）郷土資料館の資料並びに施設及び設備を損傷し、又は滅失するおそれがあると認められる方
（３）その他管理上支障があると認められる方

館内に展示されていた創建期の相模国分寺跡の模型（縮尺/百分の一）/大岡實の設計に基づく

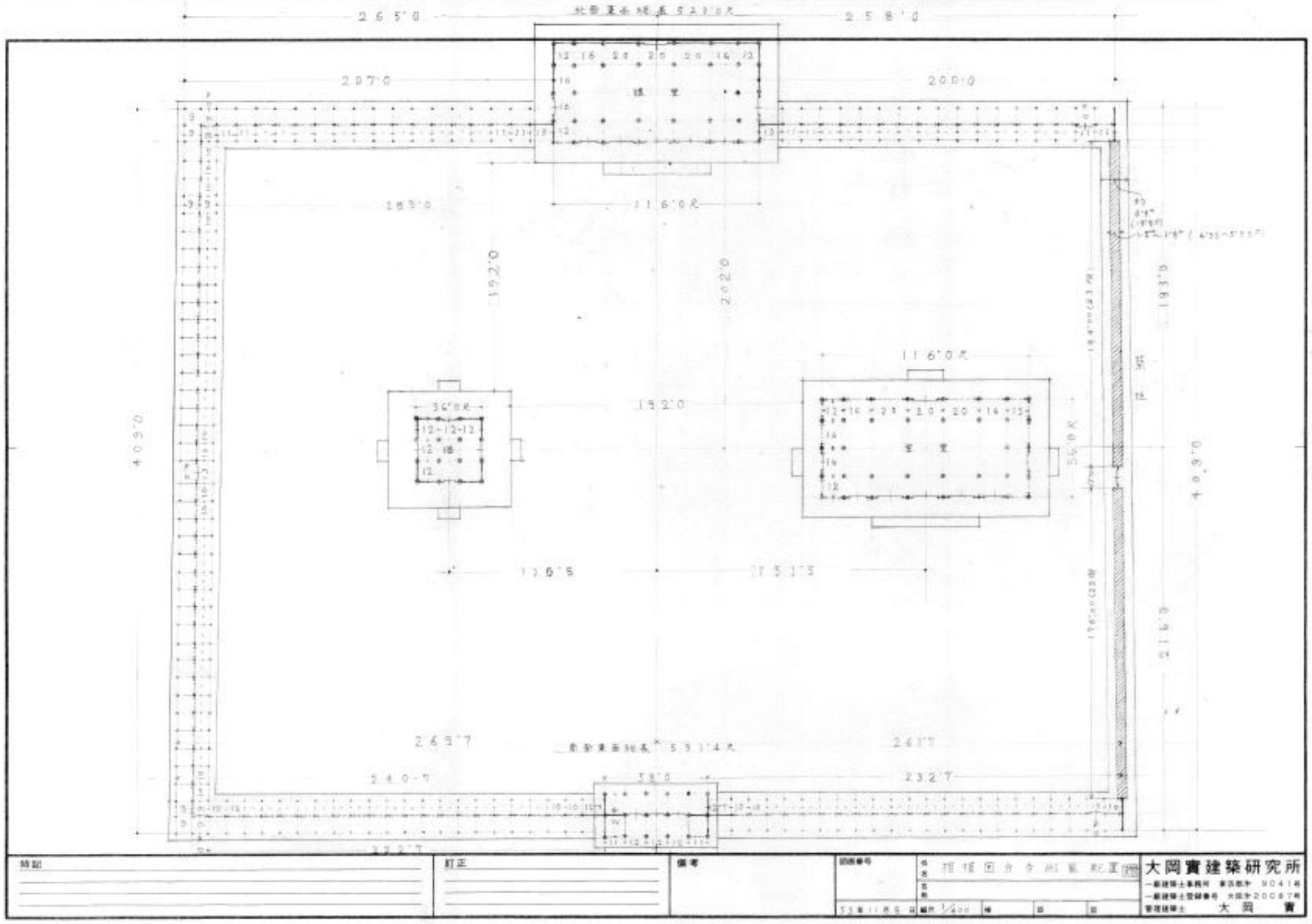
相模国分寺跡模型(創建期)/昭和61年3月25日製作・完成とある　/法隆寺式伽藍配置である



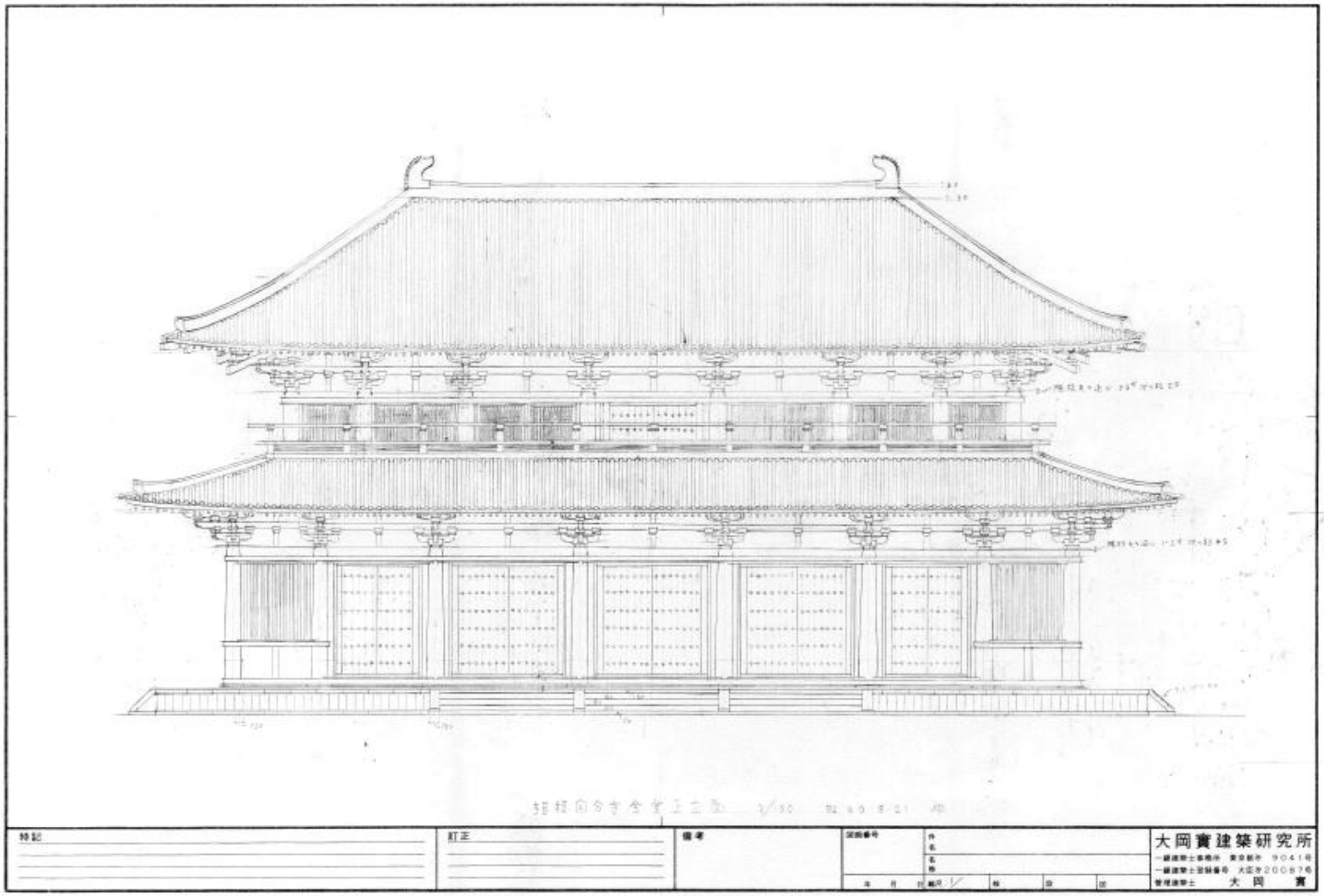
伽藍は周囲を回廊が巡るが、金堂側（東側）は地盤が高くなっているためか、東側だけは築地塀となっていたらしい

こんな感じ

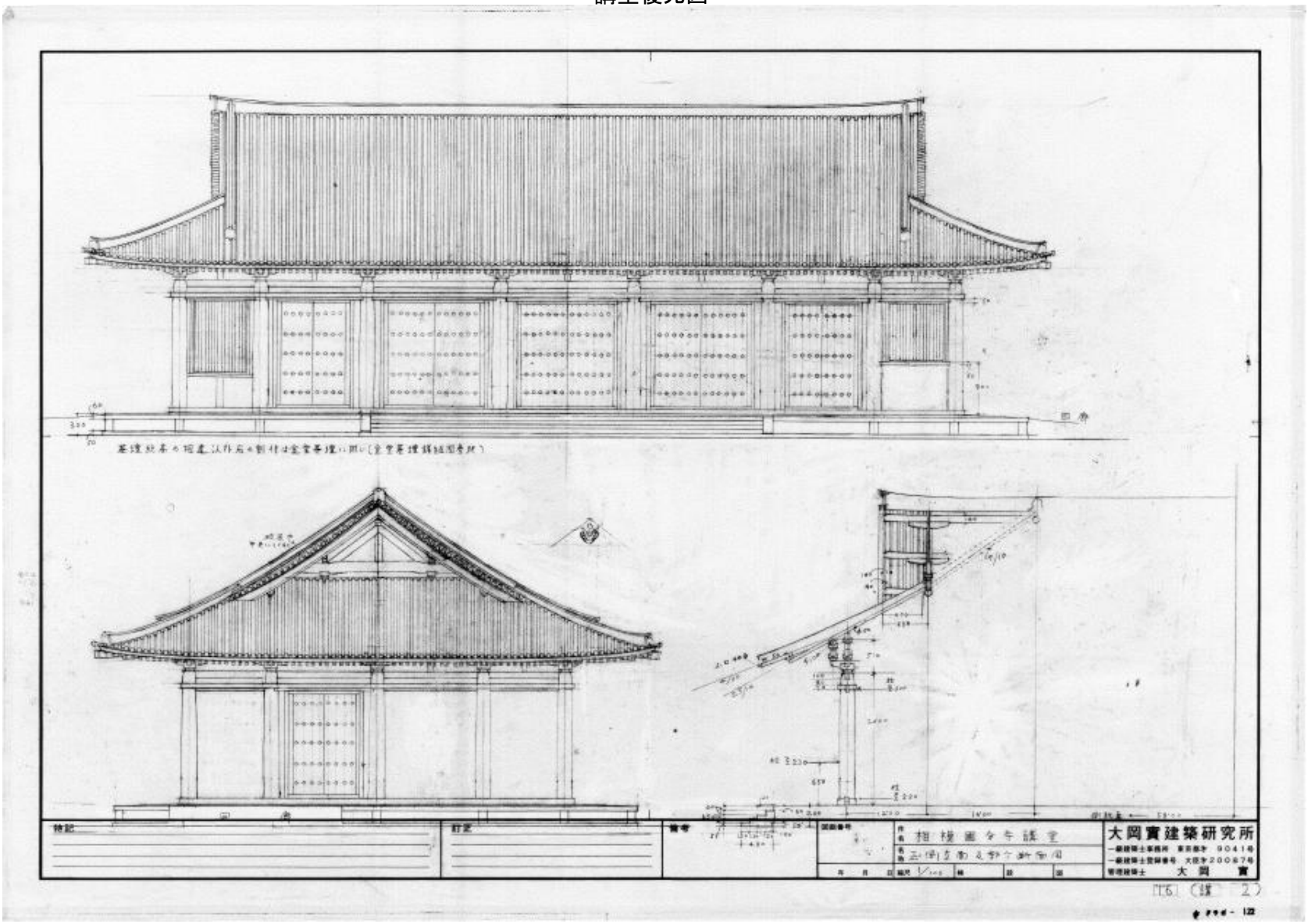
大岡實直筆の伽藍復原配置図



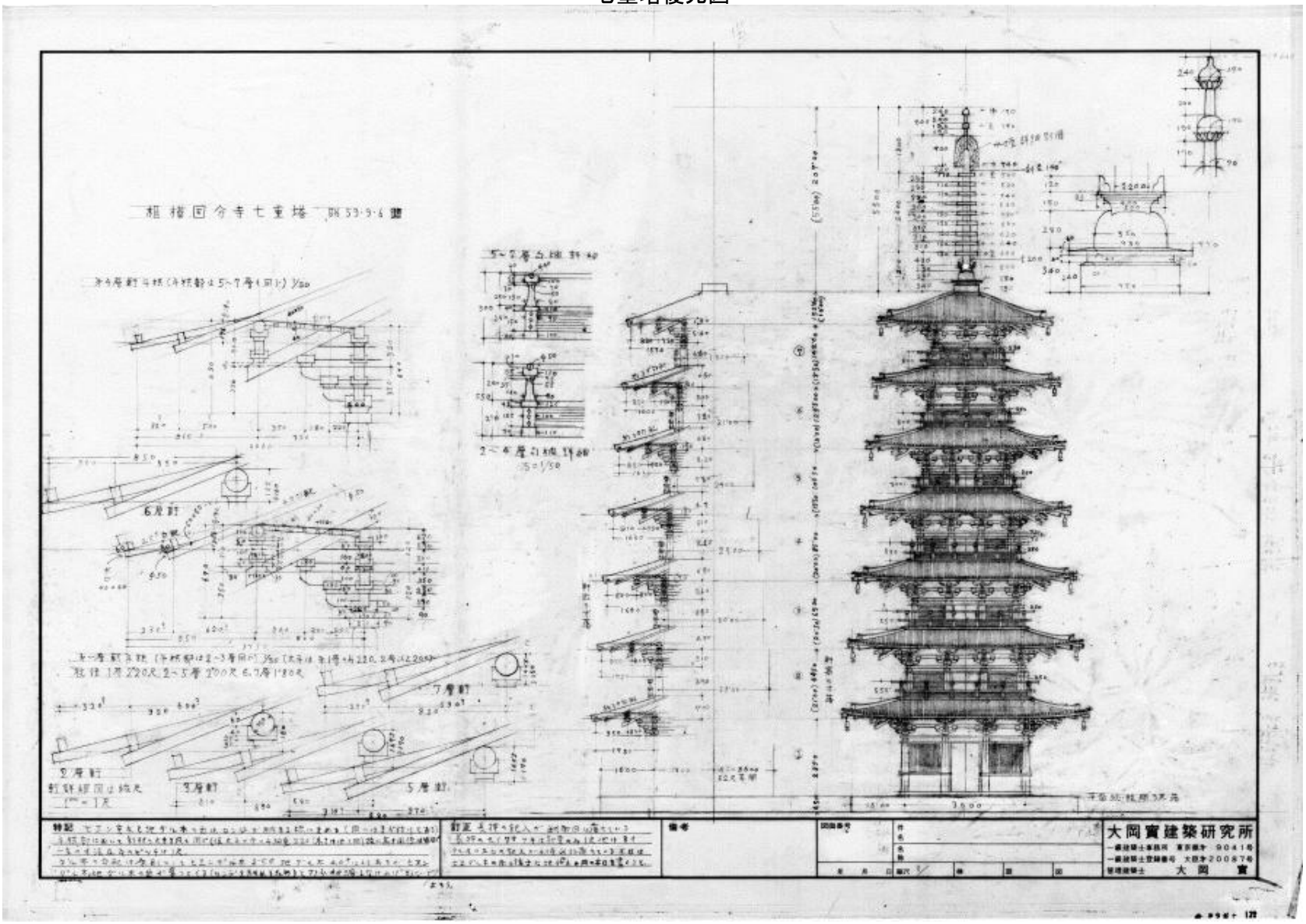
金堂復元図



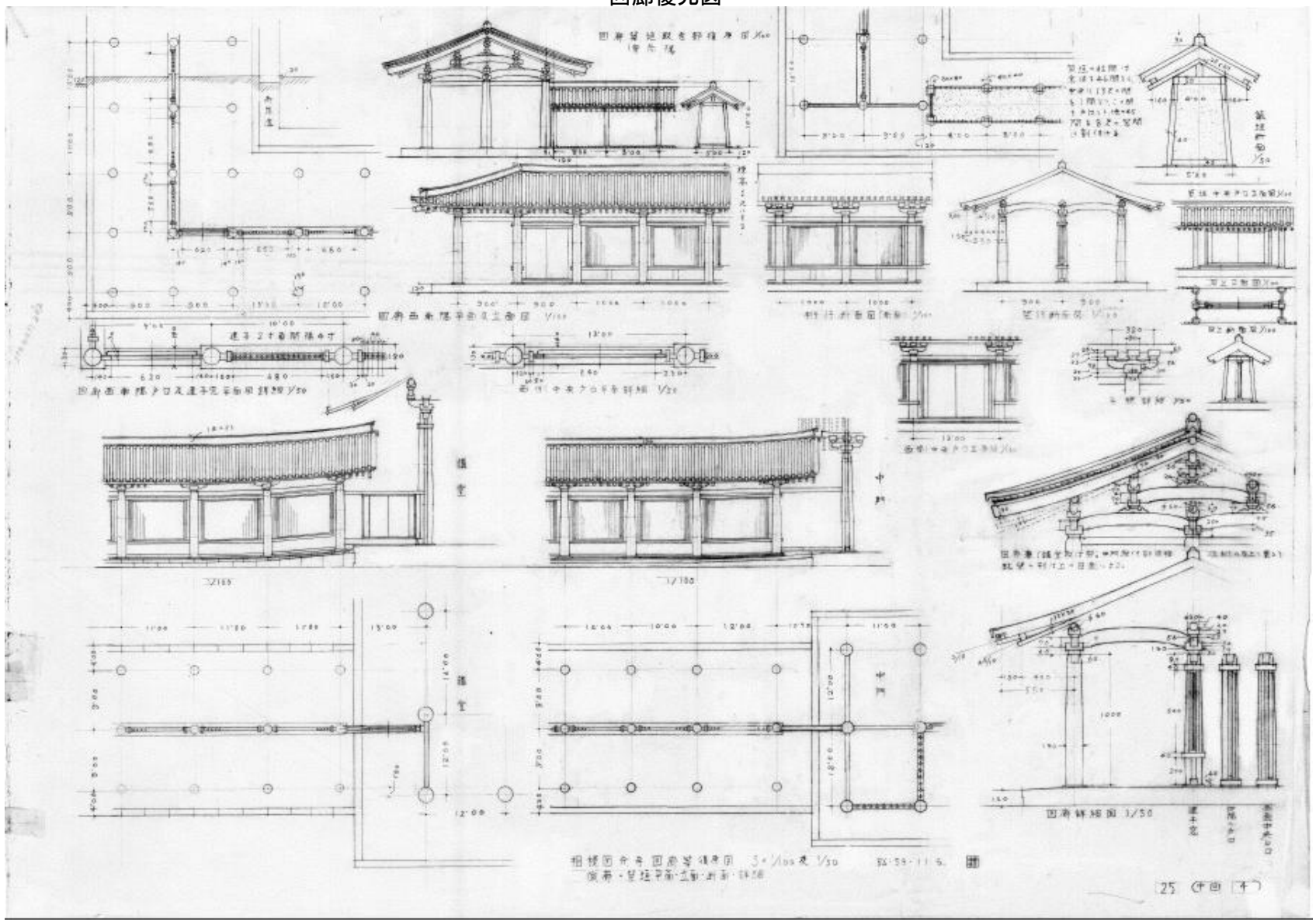
講堂復元図



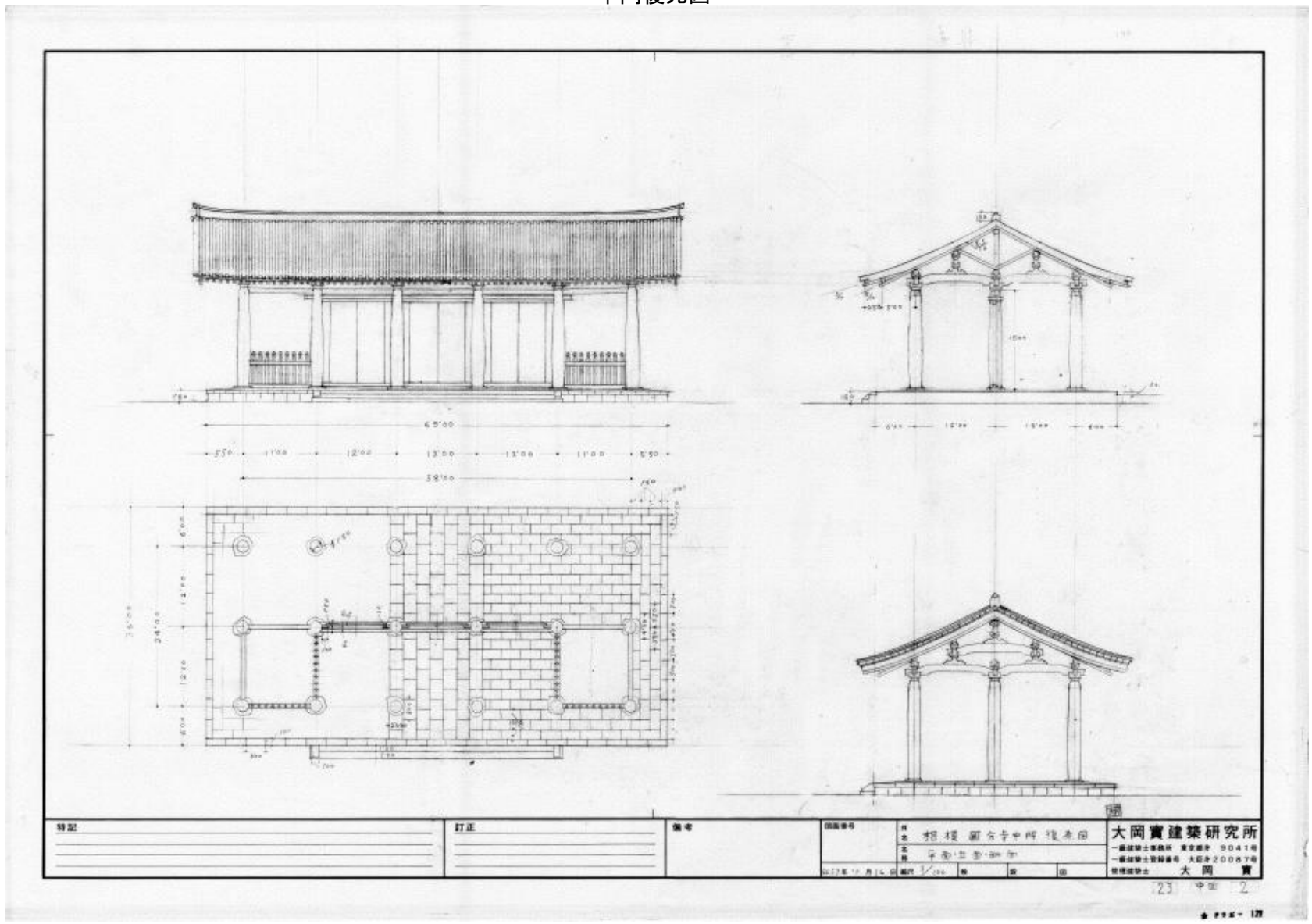
七重塔復元図



回廊復元図



中門復元図



相模国分尼寺跡

ここが相模国分尼寺跡/前方の木々の辺りが金堂跡らしい/手前の道路の辺りから後ろが講堂跡になるようだ/南方向を見たところ

この辺りが金堂跡/基壇の名残りか若干地盤が高くなっている/右手に説明板が立っている

相模国分尼寺跡（金堂跡）

この寺院跡は、相模国分寺跡の北方約600メートルに位置しています。近年、寺域内の発掘調査が数次にわたって実施され、この金堂跡のほか、講堂跡と鐘楼跡の基壇の一部が確認されました。その結果、中門・金堂・講堂が南北に並び、講堂の両脇に経蔵と鐘楼がつく伽藍配置をとること、規模は相模国分寺より一回り小さいことがわかりました。また、金堂跡の確認調査では、基壇上から桁行５間・梁行４間の大規模な礎石建物跡が検出されました。

平成３年３月31日

海老名市教育委員会

南西側から金堂跡の高まりを見たところ/確認調査によると高さ1mの土壇として残り、基壇上には礎石１５個が残存していたという

南東側から北西方向を見たところ/左手が金堂跡

北東側から南西方向を見たところ/前方の木々の辺りが金堂跡/現在は歴史公園として利用されている

金堂跡には庚申堂などが建っている

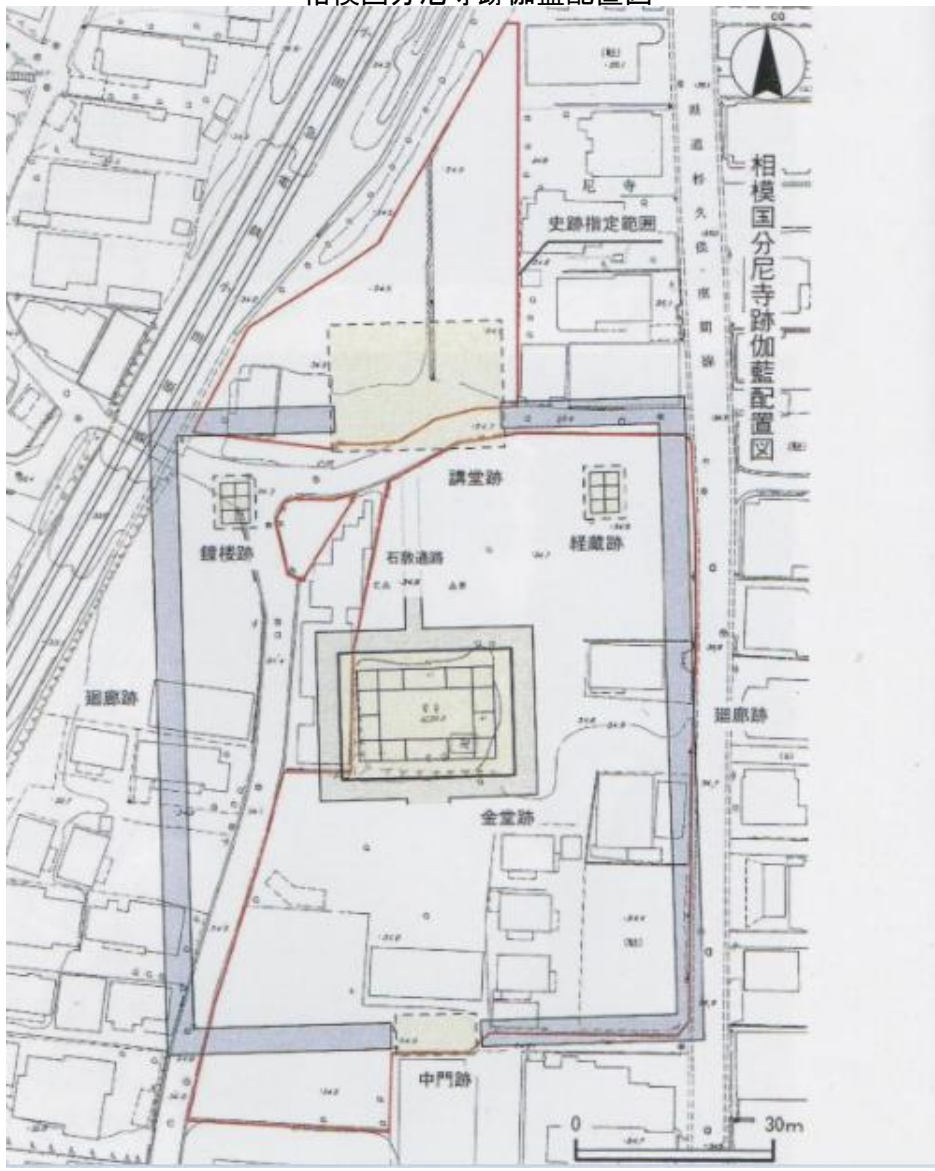
これが庚申堂

庚申塔が鎮座している/1666年の造立らしい

さまざまな石造物が立つ

傍に「國分尼寺金堂阯」と記された標柱も立つ

相模国分尼寺跡伽藍配置図



← 伽藍内には鐘楼（左）、経蔵（右）もあったようだ

「史跡相模国分寺跡　史跡相模国分尼寺跡」/海老名市教育委員会　より

参考

史跡相模国分寺跡・尼寺跡　周辺案内図
溝跡
掘立柱建物跡
竪穴住居跡
主要伽藍建物
道状遺構
国道 246 号
日月神社
至橋本駅
至新宿駅
JR線相模線
小田急線
国分尼寺北方遺跡
寺院地？
総柱掘立柱建物
庇付掘立柱建物
「法華寺」墨書土器
かがり塚
浅井の水
龍峰寺
弥生神社
清水寺公園
大松原遺跡
伽藍地推定範囲
相模国分尼寺跡
内出稲荷
古代の推定流路
内出遺跡
相鉄線
近世の流路

海老名市教育委員会　冊子より

有鹿神社
あるか

社殿

有鹿神社の奥宮について「相模原の磯部勝坂の有鹿谷には奥宮が鎮座し、その奥には有鹿の泉が今も湧き出している」と記されている

有鹿神社　御由緒

有鹿神社（あるかじんじゃ）お有鹿様は、相模国で最古の歴史と高い社格を有する。

創成

遥か遠い昔、相模大地は、海底の隆起により出現する。有鹿谷の泉を水源とし、これより流れ落ちる鳩川（有鹿河）の流域に人々は居住し、有鹿郷という楽園が形成された。縄文の頃より、有鹿の泉は水神信仰されて来たが、弥生の頃になり、農耕の発展に伴い、人々は、農耕の安全と豊穣を祈り、水引祭を起し、有鹿大明神と称え、有鹿神社をご創建した。有鹿谷の奥宮、鳩川中流の座間の中宮、相模川に合流する地の本宮である。

発展

奈良平安の頃、相模国府は有鹿郷に所在し、有鹿神社は、国司の崇敬を受け、相模国の延喜式内社中随一の社格を有した。天智天皇三年（六六四）、初めて祭礼を行い、天平勝宝六年（七五四）八年（七五六）、藤原廣政の社殿の修理と墾田五百町歩の寄進を受け、貞観十一年（八六九）、従五位上に昇階し、永徳元年（一三八一）、正一位の極位となる。広大な境内に美麗な社殿が建ち、条里制の海老名耕地を領有し、また、明神大縄（参道）は、社人の住む社家を経て寒川に至り、一大縄は、相模国分寺に至る。

変動

やがて、国府も移転し、有鹿郷から海老名郷に地名も変わり、有鹿神社は、豪族の海老名氏の崇敬を受けるに至った。その後、室町の二度の大乱を蒙り、海老名氏は滅亡し、美麗な社殿と広大な境内や社領も喪失した。
その結果、鳩川中流に鎮座した中宮も現在地に遷座し、有鹿姫の伝説（座間では、鈴鹿明神の創建の伝説となる）として残る。有鹿神社は、農耕を礎とした産業の発展を背景とし、水引祭の斎行により、海老名耕地の用水を守り、相模国五宮として人々の崇敬を集めた。

現代

明治維新となり、県社に列せられたが、郷社に留まり、神饌幣帛料供進社となった。第二次大戦後、宗教法人有鹿神社として神社本庁に属する。有鹿神社は、水引祭を通し、瑞々しい活力を与え、人々の生活の安全と繁栄を見守り続ける。神奈川の（そ　子育厄除大社として、海老名総鎮守、また、神奈川県の聖地である。

本宮

大鳥居の跡地（鳥居田）から四百米参道を進むと、鐘楼跡の有鹿姫霊地の碑を傍らに、松無しの有鹿の森が茂る本宮が鎮座する。鳥居の右側に手水舎、左側に鐘楼と神楽殿、正面に本殿を覆う覆殿・幣殿・拝殿の三棟一守の社殿がある。本殿の建築と拝殿の天井の龍絵は、海老名市の重要文化財の指定を受ける。社殿の左側に日枝社・稲荷社・諏訪社の三社、また、社務所側の東門近くに有鹿天神社が鎮座する。

中宮・奥宮

東方四百米の地に有鹿井（有鹿姫化粧井戸）、更に、二百米の地に有鹿池（有鹿明神影向池）があり、中宮が鎮座する。鳩川に沿って上流に進むと、相模原の磯部勝坂の有鹿谷には奥宮が鎮座し、その奥には有鹿の泉が今も湧き出している。

ここがその「奥宮」/ここで古墳時代から祭祀が行われていたという/後ろは勝坂遺跡のある段丘

この左手に湧水が流れ出ている

ここが「有鹿の泉」

こんな感じ

相模原市立博物館

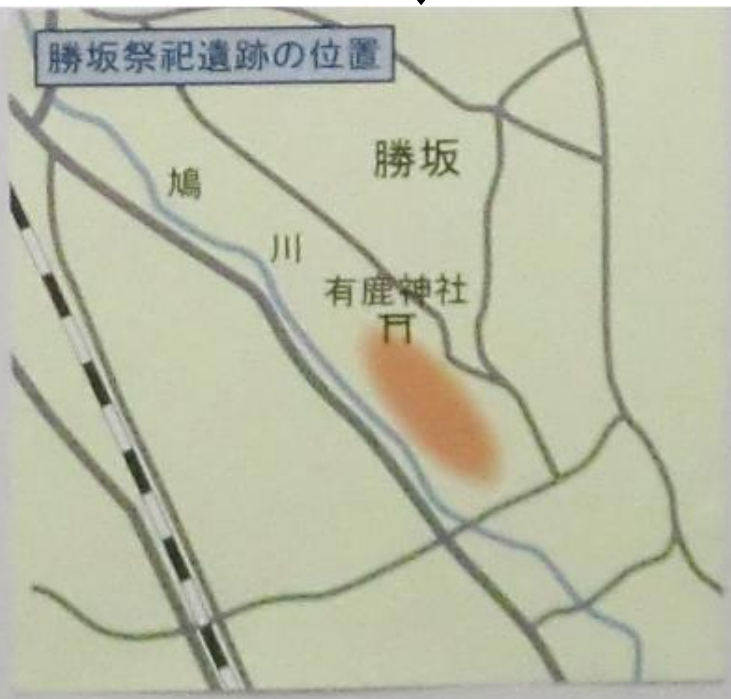
ここが相模原市立博物館

有鹿神社奥宮（勝坂祭祀遺跡）
↓

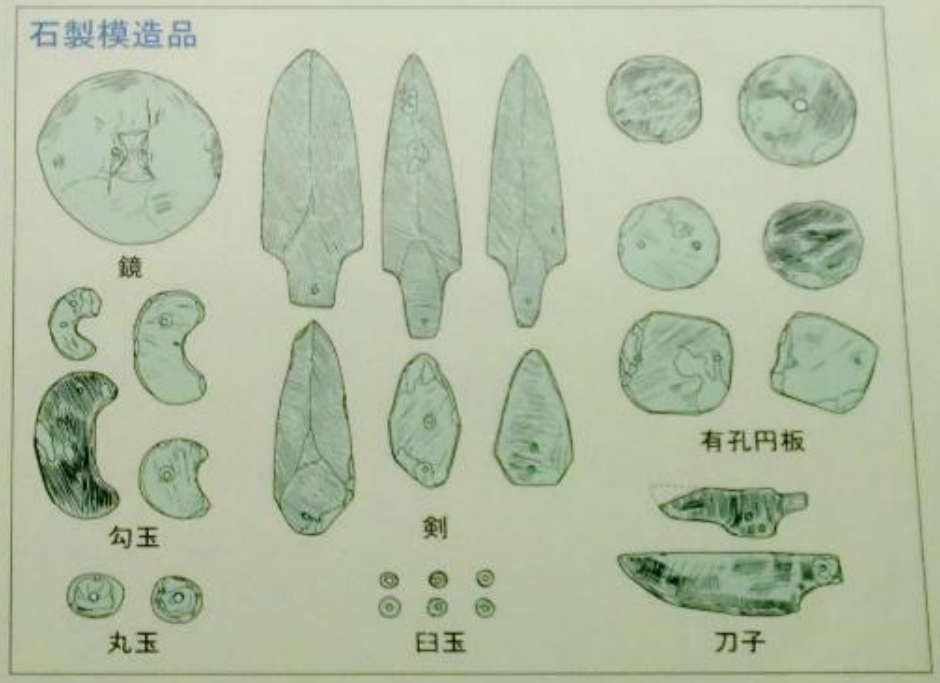
磯部の勝坂祭祀遺跡では、古墳時代の祭祀の様子を示す貴重な出土品が発見されています。それらは鏡や子持勾玉（こもちまがたま）、多量の石製模造品などで構成される祭具で、約 300 点に及びます。遺跡は鳩川沿いの湧水が湧くアルカヤトと呼ばれる場所で発見されており、その川辺に様々な祭具を捧げ、繰り返し祭祀が行われていたと考えられます。

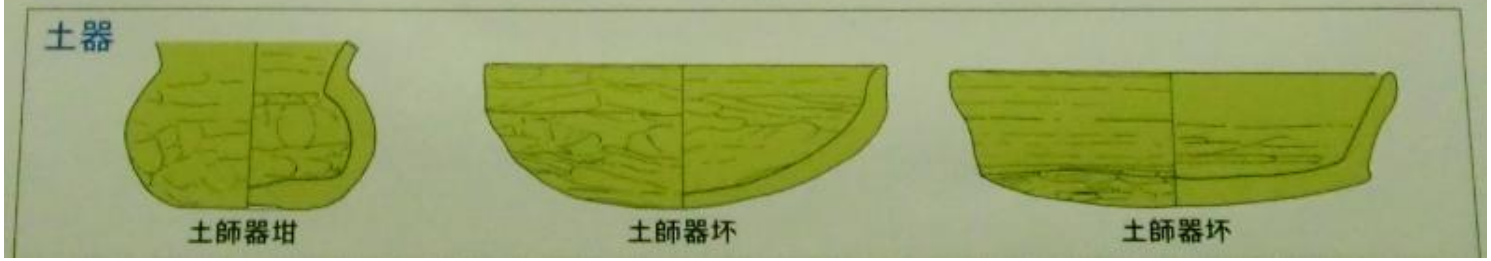
出土品の年代は 4 世紀末から 7 世紀代に及び、初期のころは石製模造品とともに鏡や玉などが用いられていたと考えられます。そして、多量の石製模造品を使用する祭祀から、やがて、土器を中心とした祭祀へと移り変わっていったようです。

この祭祀の対象は明確ではありませんが、水に対するもの、あるいは相模川を渡る際の安全祈願などが想像されます。



勝坂祭祀遺跡の古墳時代祭具





勝坂有鹿谷祭祀遺跡出土の祭祀遺物

参考ホームページ

http://www8.plala.or.jp/bosatsu/ebina/kokubunji.htm

http://www.gregorius.jp/photogallery/page_36.html

http://www009.upp.so-net.ne.jp/funa-funa/2006KANAGAWA2/20061028ebina/20061028ebina_index.html

http://www7b.biglobe.ne.jp/~s_minaga/ato_sagamikoku.htm

http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/201446

http://massneko.hatenablog.com/entry/2013/11/25/121348

http://4travel.jp/travelogue/10774791

http://blogs.yahoo.co.jp/kanezane2/17831125.html

http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/19773/1/%E5%8F%B2%E5%AD%A660_3_%E6%A2%B6%E5%8E%9F.pdf#search='%E7%9B%B8%E6%A8%A1%E5%9B%BD%E5%88%86%E5%B0%BC%E5%AF%BA%E8%B7%A1'

東水山廣徳寺
自動車部品工業
海老名工場
海老名市立今泉中
海老名市立上星小
小田急
海老名市立柏ケ谷中
東柏ケ谷近隣公
かしわ台
相模鉄道本線
寺尾緑地
246
601
51
県立相模
三川公園
海老名市立今泉小
清水寺公園
相模鉄道本線
40
綾瀬市立天台小
えびなの風保育園
日立製作所
海老名
伊勢山自然公園
42
フレスポ綾瀬
海老名市立有鹿小
小田急小田原線
釜田緑地
小園子之社
綾瀬市立早園小
厚木野球場
407
海老名市立海西中
ひさご塚公園
海老名市役所
鳳勝寺
406
東名高速道路
厚木
熊倉整形外科
602
神奈川県立海老名高
海老名市立中新田小
Google
相模川
相模川
海老名